

大学スキー実習におけるスキーの楽しさ

－小学校時の体育嫌いとの関連－

塚原奈々子 （ 京都教育大学 ）

1. 目的

本研究の目的は、大学スキー実習において、参加者のスキーの楽しさの感じ方と、小学校時の体育嫌いとの関連について明らかにすることである。

2. 研究方法

対象者は平成 30 年度後期京都教育大学講義型授業Aの受講者 147 名、平成 31 年 2 月 18～22 日および 2 月 27～3 月 3 日の大学スキー実習の参加者 63 名であり、以下の質問紙調査を実施した。

①体育授業に関する質問紙

②スキーの楽しさに関する質問紙

③体育の授業の楽しさに関する質問紙

得られたデータは t 検定および分散分析の統計処理を行った。

3. 結果と考察

1) 体育嫌いの実態

小学校時代と現在の運動の好悪感が同じである学生が多く、小学校時代の運動の好悪感が現在の運動の好悪感に影響していることが明らかとなった。

2) スキー実習参加者における体育の楽しさとスキーの楽しさの関連

スキー実習参加者において、小学校時代の体育授業の楽しさよりスキーの楽しさを強く感じていることが明らかとなった。特に、「スリルがある」ことを示す「スリル」因子、「熱中しながら技術が覚えられ上達の実感ができる」ことを示す「技術習得」因子の 2 つの因子において、スキーの楽しさ得点と体育の楽しさ得点の差が大きくなった。

また、性別による分析では、男女ともに体育の楽しさよりスキーの楽しさを感じていることが明らかとなった。特に女子においては男子より体育の楽しさをもともと低く感じていたが、スキーの

楽しさで顕著な得点向上が認められた。

小学校時代の体育授業の楽しさ合計得点から 3 群に分け分析の結果、下位群、中位群においてスキーの楽しさ得点が体育の楽しさ得点を上回る結果となった。下位群において特に顕著に得点向上がみられた因子は「応援協力」、「技術習得」、「交友」因子であり（表 1）、スキー実習の方が仲間とともに協力・応援しあって技術の習得を感じることに楽しさを感じていることが明らかとなった。

表 1 下位群の体育の楽しさとスキーの楽しさ

下位群 N=26	t検定		
	体育楽しさ M (SD)	スキー楽しさ M (SD)	t値
優越感	2.01 (0.30)	2.99 (0.63)	-6.20***
応援・協力	2.63 (0.61)	3.93 (0.75)	-9.37***
技術習得	2.60 (0.44)	4.19 (0.68)	-8.76***
交友	2.96 (0.75)	4.39 (0.49)	-6.84***
遊戯性	3.29 (0.47)	4.00 (0.88)	-2.69*
スリル	2.07 (0.73)	3.50 (0.76)	-4.62***

***p<.001 *p<.05

※因子得点については5点満点に変換

4. 結論

本研究では、スキー実習参加者において、小学校時代の体育授業の楽しさよりスキーの楽しさを強く感じていることが明らかとなった。また、スキー実習においては体育授業に対し否定的な感情を持っている者も、スキーにおいて楽しさを感じることが示唆された。本研究の結果は、小学校教員を目指す者、特に自身が運動・体育嫌いである者が、スキーで得られた楽しさの要因を体育授業で生かすことにより、体育や運動を苦手としている子どもたちにも運動や体育の楽しさを感じさせるための一手段となることを示唆している。

5. 主な参考文献

杉原鉄也、スキー合宿におけるスキーの楽しさに関する研究、京都教育大学卒業論文（2007）